

実習体験の分析(2)

肯定的体験と否定的体験（保育所実習－その二）

青木 里喜子 森安 万亀子[※] 北川 歳昭
Rikiko Aoki Makiko Moriyasu Toshiaki Kitagawa

I 目 的

現代のように、幼児教育の重大さを問われるとき、保育者養成の課題は、保育者の量を満たすことではなく質の向上であろう。

現場実習は、保母資格・幼稚園教諭の資格を取得するための必修の科目である。

保育者としての実力を備えた心豊かな学生の養成のためには、基礎的な教科学習の積み重ねと、それらを総合して実地体験を積む現場での実習が必須要件である。つまり現場実習は単なる1必修科目以上に重要な意味をもっている。その意味で実習の充実こそ優れた保育者養成の要点の1つと考えるべきであろう。

しかし、「実習公害」といわれるように、学生の現場実習は保育の場に混乱を起こしかねないことも事実である。受入側が、このような混乱や実習指導の重責を覚悟の上で、実習学生を受け入れてくれるのは、ひとえに優れた保育後継者養成のためなのである。

学生がこの貴重な機会に、どのような体験をし、それをどのように受けとめ、どのように活かしていくかは学生個人の将来ばかりでなく、保育界の将来をも左右することになる。特に学生の实習意欲や保育現場への就職志望の変化は実習体験の影響によるところが大きいと考えられる。

さきに、われわれは（森安ら，1983a；青木ら，1983）保育所実習終了後の学生の实習体験を、感動的体験（肯定的体験）と、ショック体験（否定的体験）とに分けて分析した。

これによると、肯定・否定両体験内容に、学生の主体的学習の弱さ、視点や問題意識の稀薄さなど、専門学習への取り組みのあいまいさが示されている（詳しくは森安ら，1983bを参照されたい）。

しかし、これら学生の多様な肯定的・否定的両体験をもたらしている要因は、ひとり学生個人の特性や能力のみでなく、実習生を送り出す養成側の問題であり、同時に、学生の实習に全面的なかかわりをもつ保育現場の要因も見すごすべきではないであろう。

本論文では、特に実習の体験内容と保育現場の諸要因とのかかわりを分析したい。即ち、実習園の規模・園長の属性・通勤条件や、実習全般についての、担当クラス・担当保母・実習の日数などの諸要因が、学生の实習体験に及ぼす影響を分析し、そのことにより保育者養成のあり方を探り、同時に、受入側と養成側との間で実習への共通理解を計るとともに、優れた保育後継者養成についての目標の共有を計る手掛りを得たいのである。

II 方 法

岡山県内3短大の幼児教育科（保育科）の学生370名を対象に、保育所実習終了後直ちに、実習中の

※ 就実短期大学

体験についてアンケート調査を行なった。調査項目は自由記述の中から抜粋したものである。調査の内容及び結果は森安ら（1983b）を参照。

本稿では森安ら（1983b）による肯定的体験項目群及び否定的体験項目群（表1参照のこと）について、下記の質問項目のカテゴリーとクロス集計した結果を報告する。

質問項目とは、①教職員数、②児童数、③園長先生の性別、④園長先生の勤務形態、⑤園長先生の年齢、⑥配当方法、⑦通勤方法、⑧通勤時間、⑨担当したクラスの数、⑩担当したクラスの児童の年齢、⑪主として担当したクラスの担任の先生の数、⑫担任の先生の年齢、⑬部分実習の回数、⑭全日実習の回数、⑮実習期間、⑯志望の強さ、⑰志望の変化、⑱就職の希望、⑲評価、である。

表1 肯定的体験項目群および否定的体験項目群

1 肯定的体験項目	
A群	子どものようすを見て感動した。（9項目）
B群	指導実習での子どもとのかかわりの中で感動した。（12項目）
C群	指導実習で先生とのかかわりの中で感動した。（10項目）
D群	担任の先生の姿について感動した。（7項目）
E群	実習生活全般の中で感動した。（5項目）
2 否定的体験項目	
A'群	園長先生や、担任の先生との全般的なかかわりの中でショックを受けた。（14項目）
B'群	職員の人間関係についてショックを受けた。（4項目）
C ₁ 群	担任の先生のようにすを見てショックを受けた。（9項目）
C ₂ 群	担任の先生とのかかわりの中でショックを受けた。（6項目）
C ₃ 群	指導実習（部分・全日）において、担任の先生とのかかわりの中でショックを受けた。 (15項目)
D'群	子どもとのかかわりの中でショックを受けた。（7項目）

肯定的体験及び否定的体験の得点化は、表Iの各項目について、3段階評定し（そのような体験をして感動した—2点、そのような体験をしたが感動はしなかった—1点、そのような体験はしなかった—0点、無記入—0点とした）その平均値を算出した。

Ⅲ 結果と考察

1 実習園

(1) 実習園の規模（表2）

表中の太字数字は、同一項目カテゴリー内で0.2以上の差がみられたものである。

肯定的体験は、教職員の少ない園での実習生活全般に多く見られる。特に「子どものようすを見て」（A群）や、「子どもとのかかわりの中で」（B群）、「実習生活の中で」（E群）に多く見られる。否定的体験は、教職員の多い方の「園長先生や他の先生との全般的なかかわりの中で」（C_i群）に多く見られる。

このことは、「定員60名規模位の園は家庭的雰囲気があってよい」とよく聞かすが、人数的に子どもや教職員と対応できる回数も多く、個別的によく交流できる小規模園で、和やかさの中の体験であろうと

推測される。これに反して、多人数の園での対応は、限られた時間内で、しかも、制約された活動の中では、充分なかかわり合いが持てないまま実習が終わったということではなからうか。

しかし、児童数で、多人数の「指導実習での子どもとのかかわりの中で」(B群)を見ると、子ども達と充分なかかわりはもてなかったけれど、多くの、個人差をもつ子ども達との出会いが、感動の体験に繋がっていることも考えられる。

表2 実習園の規模(教職員数・児童数)

体験 質問	肯定・否定 略号		肯定的体験項目群					否定的体験項目群						
	設 問 カ テ ゴ リ	内 容 設 定 人 数	A	B	C	D	E	A'	B'	C ₁	C ₂	C ₃	D'	
項 目			子どもの様子を見て	指導実習での子どもとのかかわりの中で	指導実習での先生とのかかわりの中で	担任の先生の姿を見て	実習生活の中で	園長先生や他の先生との全般的なかかわりの中で	職員間の人間関係について	担任の先生とのかかわりの中で(姿を見て)	担任の先生との間で	指導実習において担任の先生と(全部)	子どもとのかかわりの中で	
	教職員数	5人~9人	151	10.0	15.5	12.7	9.0	5.3	1.5	0.9	0.9	0.7	2.2	2.4
		10人~20人以上	219	9.8	15.2	13.2	8.9	4.6	1.8	1.0	1.1	0.6	2.2	2.4
児 童 数 (乳児を含む)		60人以下	60	10.0	14.2	12.9	9.6	5.1	1.8	0.9	0.7	0.6	2.3	2.7
		60人~150人	231	9.9	15.5	13.2	8.9	4.9	1.6	1.0	1.0	0.7	2.2	2.4
		150人以上	78	10.0	15.8	12.3	8.7	4.8	1.9	0.8	1.3	0.7	2.2	2.2

(2) 園長先生の属性(表3)

園長の性別では、肯定的体験は(A群)から(E群)の全群にわたり男性園長に多く見られ、否定的体験は(A'群)から(D'群)の全群にわたり女性園長に多く見られる。

園長の勤務形態で見ると、常勤形態では肯定的体験が「子どものようすを見て」(A群)と「指導実習での先生とのかかわりの中で」(C群)に多く見られ、非常勤形態では、「指導実習での子どもとのかかわりの中で」(B群)、「実習生活の中で」(E群)に多く見られるが、どちらかといえば非常勤形態に肯定的体験が多く見られる。否定的体験は、(A'群)から(D'群)の全群にわたり常勤形態に多く、また、高い数値を示している。

園長の年齢による肯定的体験には余り差が見られないが、否定的体験は50才から60才の高い年齢の方に全群を通して多い。

これらを見ると、男性園長設置の全体に占める絶対数の違いや個人差にもよると考えられるが、男性と女性の固有な対人関係のあり方の「おおらかさ」や「許容度」の相違や、保育の場へのかかわり度の差によるものではないかと推測される。つまり、女性特有の「細やかさ」や「気づかい」また男性に比べての「心の狭さ」なども影響するのではないだろうか。

常勤・非常勤また年代の差にもよるが、実習生は常に園長の視線を感じ、女性園長の「かゆいところに手が届く」ような行届いた細かい指導は、直接の叱責はなくても、緊張のゆるまない体験であろう。しかし、それらを否定的体験とするならばいかにも現代学生の意欲のなさを感じ、あえてそのような体験を必要な体験として持たせたいものである。

表3 園長先生の属性 (園長先生の性別・勤務形態・年齢)

体験 質問	肯定・否定 略号	設 問 内 容	肯定的体験項目群					否定的体験項目群					
			A	B	C	D	E	A'	B'	C ₁	C ₂	C ₃	D'
項目	カテゴリー	設 問 内 容	子どもの様子を見て	指導実習での子どもとのかかわりの中で	指導実習での先生とのかかわりの中で	担任の先生の姿を見て	実習生活の中で	園長先生や他の先生との全般的なかかわりの中で	職員間の人間関係について	担任の先生とのかかわりの中で(姿を見て)	担任の先生との間で	指導実習において担任の先生と(全部,部分)	子どもとのかかわりの中で
園長先生の性別	男性	46	10.1	15.9	13.0	9.2	5.1	1.5	0.7	0.5	0.5	2.1	2.5
	女性	324	9.9	15.2	13.0	8.9	4.9	1.7	1.0	1.1	0.7	2.2	2.4
園長先生の勤務形態	常勤	354	9.9	15.2	13.0	9.0	4.9	1.7	1.0	1.0	0.7	2.2	2.4
	非常勤	12	9.6	16.0	12.6	9.1	5.3	0.3	0.3	0.2	0.6	1.3	1.8
園長先生の年齢	30才~49才	204	9.9	15.0	13.0	9.0	4.9	1.6	0.9	1.0	0.6	2.1	2.4
	50才~60才	163	9.9	15.7	12.9	8.9	4.9	1.8	1.3	1.0	0.8	2.4	2.4

(3) 通勤条件 (表4)

出身園で実習した学生は、肯定的体験を多くしている。特に「実習生活の中で」(E群)に多く、「担任の先生の姿を見て」(D群)、「指導実習での先生とのかかわりの中で」(C群)にも多く見られる。また、出身園ではないが、何らかのかかわりで自分が希望した園での実習には、「子どものようすを見て」(A群)、「指導実習での子どもとのかかわりの中で」(B群)に、大学が指定した園で実習した学生は「子どものようすを見て」(A群)に、それぞれ肯定的体験が多くみられる。否定的体験は、出身園の実習において全群にわたり少いのが特徴としてみられる。また、大学指定園での実習においては、「園長先生や他の先生とのかかわりの中で」(A'群)に、出身園での実習の2倍もの否定的体験がみられることに注目したい。

これらは、学生が出身園での実習では、自分の幼ない頃の思い出の生活の場である故に、実習生活の

表4 通勤条件 (配当方法・通勤条件・通勤時間)

体験 質問	肯定・否定 略号	設 問 内 容	肯定的体験項目群					否定的体験項目群					
			A	B	C	D	E	A'	B'	C ₁	C ₂	C ₃	D'
項目	カテゴリー	設 問 内 容	子どもの様子を見て	指導実習での子どもとのかかわりの中で	指導実習での先生とのかかわりの中で	担任の先生の姿を見て	実習生活の中で	園長先生や他の先生との全般的なかかわりの中で	職員間の人間関係について	担任の先生とのかかわりの中で(姿を見て)	担任の先生との間で	指導実習において担任の先生と(全部)	子どもとのかかわりの中で
配当方法	出身園希望	17	9.4	15.2	13.6	9.4	5.6	0.9	0.5	0.8	0.4	1.6	2.1
	自分希望	115	9.9	15.8	13.1	8.8	4.9	1.6	0.9	1.2	0.8	2.2	2.5
	大学指定	238	9.9	15.0	12.9	9.0	4.9	1.8	1.0	1.0	0.6	2.3	2.4
通勤方法	自宅から	257	10.9	15.5	13.0	8.9	4.8	1.7	0.9	1.0	0.7	2.4	2.3
	寮・下宿	102	9.8	15.3	13.0	9.2	5.2	1.8	1.0	1.2	0.5	1.9	2.5
	園内に泊宿	4	9.8	12.5	12.0	8.5	5.5	1.8	1.3	2.0	0	0.8	2.0
通勤時間 (片道)	15分未満	160	10.0	15.7	13.4	9.2	5.0	1.7	1.0	1.0	0.7	2.2	2.3
	15分~29分	112	9.9	15.3	13.1	8.6	4.9	2.1	1.0	1.2	0.8	2.4	2.5
	30分~59分	85	10.1	14.2	12.0	8.9	4.7	1.2	0.8	0.8	0.4	2.0	2.4
	60分以上	13	10.2	17.2	13.1	9.3	6.4	1.2	0.8	1.2	0.6	2.2	2.5

すべてに心情的に安定し肯定的体験となったのであろう。

自宅や寮からの通勤では、肯定的・否定的体験共にバラツキがみられるが、どちらかといえば自宅からの通勤に肯定的体験は多い。否定的体験は、少数であるが園内宿泊学生に多い。

これは、実習の緊張を、家族と共に過ごす一時ではほぐすことのできる学生と、昼夜をvariなく仕事場である園内で、或は、集団生活の寮や、疲れていてもすべての生活が自分の手に掛る下宿の生活をする学生との相違かとも考えられる。

通勤時間では、片道60分以上に肯定的体験が全般的に多くみられるのは意外であるが、通勤に要する時間は、「配当方法」、「通勤方法」とも関連した項目として考えられる。従って、通勤には手ごろな所要時間と考えられる片道15分から29分までに、否定的体験が多くみられるのもうなづける。

2 実習全般(表5)

(1) 担当したクラス

担当したクラスの数、2クラス以上に肯定的体験が多く、否定的体験もクラスを多くした方に全般的に多い。特に肯定的体験では「指導実習で子どもとのかかわりの中で」(B群)、「子どものようすを見て」(A群)に多い。

表5 担当したクラス (担当したクラスの数・担当したクラスの児童の年齢)

質問 項目	設問 内容 カテゴリ	肯定・否定 略号 該当人数	肯定的体験項目群					否定的体験項目群					
			A	B	C	D	E	A'	B'	C ₁	C ₂	C ₃	D'
担当した クラスの数	1クラス	276	9.8	15.0	13.0	8.8	4.9	1.6	1.0	1.1	0.6	2.0	2.3
	2クラス	62	10.2	15.8	12.5	9.4	5.1	1.8	1.0	0.9	0.7	2.6	2.9
	3クラス以上	32	9.8	17.2	13.7	9.8	5.3	1.8	0.7	0.9	1.2	3.2	2.3
担当した クラスの 児童の年齢	3歳未満	154	9.7	15.0	13.0	9.0	4.4	1.8	1.1	1.0	0.7	2.4	2.1
	3歳児	117	9.9	16.0	12.9	8.9	5.1	1.8	0.8	1.1	0.7	2.4	2.5
	4歳以上	97	10.3	14.9	13.1	8.9	5.4	1.3	0.8	1.0	0.4	1.7	2.7

表6 担任の先生 (担任の先生の数・担任の先生の年齢)

質問 項目	設問 内容 カテゴリ	肯定・否定 略号 該当人数	肯定的体験項目群					否定的体験項目群					
			A	B	C	D	E	A'	B'	C ₁	C ₂	C ₃	D'
担任の 先生の数	1人	182	10.0	15.4	13.0	9.0	5.5	1.5	0.7	0.9	0.6	2.0	2.6
	2人	114	9.8	15.3	12.8	8.8	4.7	1.8	1.5	1.2	0.8	2.2	2.4
	3人以上	74	9.6	15.1	12.9	8.9	4.0	1.9	0.9	1.2	0.6	2.9	1.9
担任の 先生の年齢	23歳未満	51	9.9	15.4	12.8	9.1	4.7	2.0	0.5	1.3	0.8	2.2	2.5
	24歳~29歳	168	9.9	15.5	12.9	8.9	5.1	1.8	1.1	1.1	0.7	2.4	2.5
	30歳以上	149	9.9	15.0	13.1	8.9	4.8	1.5	1.0	0.9	0.6	2.0	2.2

担当したクラスの児童の年齢では、4歳以上に肯定的体験が多く、否定的体験は年齢の低い3歳未満児と3歳児に多くみられる。これらは、クラス毎に違う個性や、子どもの姿、年齢に応じた発達の姿を見たり、4・5歳児との対応の手ごたえに感動し肯定的体験をもつと共に、乳児や年少児との対応の難しさに戸惑ったようすが推測される。

(2) 担任の先生 (表6)

担任の先生の数に1人の方に肯定的体験が全般的に多く、反対に複数担任の方に否定的体験が多く見られる。特に2人の複数担任にその数値は高い。担任が1人の場合は、日常生活の場での1対1の交流もその密度が濃く、少々の否定的体験をしても相手を分り合うことが早く、むしろその否定的体験が肯定的体験として吸収消化できるのであろう。複数担任の場合は、担任同志の人間関係に起因した否定的体験もあろうかと考えられる。しかし単数担任であれ、複数担任であれ、それにかかわる学生の資質も大きい要因であらう。

担任の先生の年齢では肯定的体験に余り差はみられない。否定的体験はどちらかといえば、若い年齢層に多くみられる。年齢の開きの少ない若い指導者と学生との交流の中には、実習生・保育者・若者、と三者三様の役割やあり方がうまくかみ合わない未熟さが、学生はもとより保育現場にもありはしないかと考えられる。

(3) 実習の期間 (表7)

実習の期間を「短かすぎと思う」と答えた学生は、肯定的体験を全群にわたり多くもち、否定的体験は少ない。また、定められた期間を、長すぎてても余しぎみの学生は、否定的体験を全群にもちその数値も高い。

部分実習の回数については、肯定的体験も否定的体験もその差は認められない。

全日実習の回数については、肯定的体験にはバラツキが見えるが、どちらかといえば、5日から10日

表7 実習の期間 (実習期間・部分実習・全日実習)

体験 質問 項目	設 問 カ テ ゴ リ	肯定・否定 略号	肯定的体験項目群					否定的体験項目群					
			A	B	C	D	E	A'	B'	C' ₁	C' ₂	C' ₃	D'
			子どもの 様子を見 て	指導実習 での子ど もとのか かわりの中 で	指導実習 での先生 のかかわ りの中 で	担任の先 生の姿を 見て	実習生活 の中で	園長先生 や他の先 生との全 般的なか かわりの中 で	職員間の 人間関係 について	担任の先 生とのか かわりの中 で (姿 を見て)	担任の先 生との間 で	指導実習 において 担任の先 生と (全 部)	子どもと のかかわ りの中 で
実習期間	長 すぎた 24	93	13.0	10.3	7.1	3.8	4.5	2.1	2.5	1.9	4.8	3.0	
	困 らな 101	9.5	15.0	13.7	8.3	4.8	1.6	0.9	1.0	0.6	2.2	2.4	
	か ちよ ど よ か つた 209	10.1	15.6	13.4	9.4	5.0	1.5	0.9	1.0	0.6	2.0	2.4	
	短 すぎ か た 95	10.3	16.3	13.4	9.5	5.4	1.1	0.9	0.6	0.4	2.0	2.0	
部分実習	1日 ～ 5日	274	9.9	15.2	12.8	9.1	5.0	1.6	0.9	1.0	0.7	2.2	2.5
	6日 ～ 10日	95	9.9	15.4	13.8	8.8	4.9	1.7	1.0	1.1	0.6	2.2	2.3
全日実習	1日 ～ 2日	194	9.8	14.9	13.1	9.1	5.1	1.5	1.0	1.1	0.6	1.9	2.5
	3日 ～ 4日	124	9.9	15.3	13.0	8.8	4.5	1.9	0.8	1.0	0.6	2.5	2.3
	5日 ～ 10日	47	10.4	15.4	12.5	8.8	5.4	2.0	1.3	1.9	0.9	2.8	2.3

と多い回数に多くみられ、否定的体験も共に多い。この結果は一見矛盾に見えるが、これは、全日実習での多い苦勞が、終局的には自分へのみのりとして位置づいた場合には、肯定的体験として受けとめたのであろう。

全日実習の苦しさと共に学生の学ぶ意欲や、現場の苦勞もうかがえる。しかし、否定的体験の数値からみると、5日から10日の全日実習の回数は少し多いのではないかと考えられる。

3 志望への影響 (表8)

保育者への志望度の高いほど肯定的体験を全群にわたり多くもち、志望度の弱いほど否定的体験を全群で多くしていることがみられる。志望への変化(図1)や、就職への希望についても、肯定的・否定的体験とも同じ傾向をみせている。

これによっても分るように、保育者志望の強弱は実習への意欲にかかわり、また、その意欲のありなしは、実習体験を肯定的或は否定的にし、志望の変化をもたらすということが判明したといえる。

表8 志望への影響 (志望の強さ・志望への影響・就職への希望)

質問項目	体験		肯定的体験項目群					否定的体験項目群					
	肯定	否定	A	B	C	D	E	A'	B'	C ₁	C ₂	C ₃	D'
志望の強さ	強い	265	10.2	16.1	13.4	9.2	5.1	1.6	0.7	0.9	0.6	2.2	2.3
	どちらとも言えない	59	9.1	13.2	11.4	8.3	4.4	1.7	1.1	1.0	0.6	1.9	2.4
	弱い	45	9.6	13.6	12.5	8.2	4.4	2.1	1.3	1.6	1.1	2.6	2.8
志望への影響(変化)	強くなった	265	10.1	16.4	13.7	9.3	5.1	1.3	0.9	0.9	0.5	2.0	0.3
	かわらない	59	9.7	13.5	13.0	9.0	4.6	1.6	0.7	0.9	0.4	1.9	2.4
	弱くなった	45	9.3	13.2	10.0	7.4	4.6	3.3	0.6	1.8	1.5	3.7	2.6
就職への希望	就いた	247	10.2	16.0	14.2	9.7	5.2	0.9	0.6	0.6	0.3	1.5	2.3
	わからない	60	9.5	13.9	11.3	8.3	4.4	2.0	1.4	1.4	0.8	3.2	2.5
	したくない	61	9.0	13.9	9.5	6.4	4.6	4.7	2.2	2.4	1.8	4.0	2.5

4 評価 (表9)

実習園からの評価と実習体験とのかかわりを見ると、肯定的体験は全群にわたり、評価の良い方に多

表9 評価

質問項目	体験		肯定的体験項目群					否定的体験項目群					
	肯定	否定	A	B	C	D	E	A'	B'	C ₁	C ₂	C ₃	D'
評価	悪い	5	10.0	15.8	11.0	7.4	5.0	5.0	2.2	3.6	2.2	2.0	3.2
	普通	108	9.4	15.4	11.7	8.5	4.5	2.0	1.1	1.2	0.7	2.5	2.2
	良い	218	10.3	16.0	13.9	9.2	5.1	1.4	0.8	0.9	0.6	2.0	2.3

くみられ、否定的体験は、小人数ではあるが評価の悪い方に非常に多くみられる。

肯定的体験では特に「指導実習で先生とのかかわりの中で」（C群）、「担任の先生の姿を見て」（D群）に多くみられる。否定的体験は「園長先生や他の先生とのかかわりの中で」（C群）に多くみられる。

即ち、園の職員や担任との人間関係のよしあしが、学生の実習体験を肯定的・否定的にするといっても過言ではない。

保育現場での、学生の評価は、主として、実習への意欲・責任感・研究的態度・協調性・指導の計画その他があるが、特に学生の実習生活を左右すると思われる意欲は、学生自身の資質はいうまでもないが、保育の場とのかかわりが大きいことを改めて感じるのである。

V ま と め

1) 学生の実習体験は、保育の場の、園の規模・園長の属性・担当クラスの状態・その他実習の諸条件に、直接的・間接的に影響され、肯定的体験は実習の意欲を強め、否定的体験は保育者志望を弱めることがあると推測された。

2) 肯定的体験・否定的体験とも、学生が感情を動かされるのは子どもとのかかわりの項目に最も多くみられる。実習前調査によると、実習に先立ち今一番心配なことは「子ども達と早く慣れ、うまく接しられるか」、知りたいことは「子どもはどんな遊びに興味があるのか」、「子どもをひきつける方法やことば掛け」、そして、ぜひ学んで来たいことは「子どもとの接し方」であった。

以上のことから推察できるように、実習体験の中で対子どもの項目が大きなウェイトを占めるのは、学生の幼児理解の未熟さによる不安と期待の入り交った、不安定な心情の反映のためであろう。実習の場で、年長の子どもから「せんせい」と声を掛けられて不安が消え、感動し、以来肯定的感情のもとで実習に臨めたり、または、努力して声を掛けてみても、乳児や年少児であればその反応も乏しく、子どもからの受容がないままそれが否定的体験となり、実習が消極的になることも考えられる。また、子どもはすべて可愛く好ましいものと思っている学生に、年長児はときに手きびしい反応を示し、否定的体験をするなど、児童の年齢による実習体験の相違のあること、又は児童数の多少についても、個々の児童との触れ合いが多くもてる小人数の園での実習が好ましい実習体験に有利であることが判明した。

しかし、児童の年齢や児童数の多少によらず、保育学生に求められるものは、『こどもをみる目の育ち』である。学生は、「子どもの発達のとらえ方」は未熟で乏しい。

平素、学生が幼児理解への主体的学習に取り組むことは勿論、養成教育の教科内容における、理論と実践の具体化など工夫された教授が必要であるが、実習中にも、具体的保育場面の中で、幼児の実態な

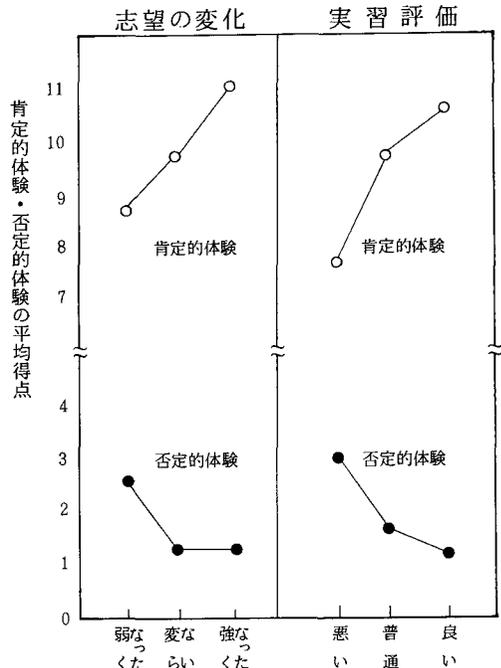


図1 志望の変化および評価と実習体験

ど、『臨床的指導』を得られることが最も望ましいのではなかろうか。

その意味でも、参加実習に入る前の観察実習は重大で、その充実に配慮しなければならないと思われる。

3) 次に少数ではあるが、否定的体験に、園内における人間関係の難しさが顕著に表明されている。これは、一方的な学生からの見方で、そのままのみはできないものの、傾聴すべき点もみられる。園長や担任及び職員数などが、児童や実習の期間やその内容に相互に交錯し、学生とかわり合って生ずる諸々の人間関係の難しさや、それに伴う実習のやりづらさをみることができた。特に保育所の場合、従事する職員の数も多く職種も多様である。また、保育に欠ける児童の長時間の保育は家庭との密接な連繫を抜きにしては成り立たない。朝夕の保護者の出入りなども、園の規模が大きければ大きいほど人間関係が複雑化するの当然であろう。

園長や担任との世代や年代によるものの見方や考え方の相違、複数制による担任とのかかわり、あるいは、学生が描いていた「理想の保育者像」との相違によるものなどが、否定的体験に繋がったのではないかと考えられる。

しかし、これらは、視点を変えれば、学生の豊かで多彩な社会現象への参加体験の不足からくるものであろう。つまり、学生の実習体験からは、人間関係について保育学生らしい優しさはうかがえるものの、自己中心的、場面的、心情的など、社会的認識の乏しさが見出せるのである。また、同時に養成校側の、一般的社会の複雑で多様な人間関係や社会現象についての教授、保育者像の提示のあいまいさによることも反省すべき点であろう。養成教育の中に、具現し得る理想の保育者像の定見を示すと同時に、ここに到るまでの困難な過程をも理解させるべきではないだろうか。

しかしながら、この否定的体験に保育の場の問題がないとは云いきれない。

園長の性別や職員の年齢にかかわらず、保育者集団は好ましい保育者適性を備えた集団であるべきである。保育者適性は、北川(1983)が示しているように、単に作業能力や成績などの外面的、技能的な側面のみならず、意欲や自信・満足感など内面的な側面における能力や特性をさすという。児童にとっても、実習生にとっても内面的な適性も備えた保育者集団から指導を受けることがもっとも好ましいのである。

4) 実習の評価は特に担任とのかかわりが大きく左右している。即ち担任とうまくいくことが前提である。実習生のなすことの殆んどすべては、平素の保育を混乱させるものであろうが、担任の実習学生への理解と、学生の誠意と努力が完成一体となった時、実習の効果が約束されるのであろう。一対一の細やかな根気強い指導に感動し意欲的に実習に取り組めた学生は評価もよく、保育者志望も強まっている。逆に、担任とうまくいかないときはお互いに気まづく消極的な実習になり志望も弱まっている。

つまり、評価がよいということは、肯定的体験が多いことであり、肯定的体験が多いことは評価がよく、担任や他の先生方とうまくいっていることである、というように、評価と体験は表裏一体の関係にあると考えられる。そのような意味では、誰でも感動するような場や、できごとに感動できない学生は保育学生としては問題である。

保育は、乳幼児の成長発達を援助するいとなみで、そのいとなみの中で保育者は相手にどうかかわれるか、その姿勢が問われる。その基本的前提は「相手の立場と人格の理解」「相手の受容」である。即

ち相手が、児童であれ、保育者や学生であっても、相手への受容と理解があれば、否定的体験も転じて肯定的体験として自分に位置づけることができるはずである。

以上保育の場と学生の実習体験とのかかわりを述べてきたが、これらは、われわれの偏見にすぎぬかも分らない。われわれは更に保育者養成の立場から、一般教科とはことなる、実習教科の理想的なあり方を探ると共に、受入側の全面的な協力を得て、優れた保育後継者の養成につとめたい。

引 用 文 献

- 青木里喜子, 森安万亀子, 北川歳昭 1983 実習体験の分析(2) 感動体験とショック体験(保育所実習—その二), 友松諦道ら(編) 就学前教育運営実例事典, チャイルド社, pp. 828-831.
- 北川歳昭 1983 保育者適性—教師評価・自己評価と性格特性—, 全国保母養成協議会第22回研究大会発表論文集, pp. 34-35.
- 森安万亀子, 青木里喜子, 北川歳昭 1983a 実習体験の分析(1) 感動体験とショック体験(保育所実習—その一), 友松諦道ら(編) 就学前教育運営実例事典, チャイルド社, pp. 824-827.
- 森安万亀子, 青木里喜子, 北川歳昭 1983b 実習体験の分析(1) 肯定的体験と否定的体験(保育所実習—その一), 就実論叢, 13号, pp. 311-340.
- 澤 文治, 民 秋言 1982 保育所実習の方法と課題, 学苑社
- 徳本達夫 1981 短大における保育者養成教育の諸問題と課題, 山口芸術短大紀要, pp. 137-158.

<付 記>

本論文の概要は、日本保育学会第36回大会(1983)において発表した。